



Be creative !

「言葉」とともに生きる—2月29日 卒業式 校長式辞

君たちは覚えているでしょうか。

1年生のGFS Iの授業で一時間だけではありませんでしたが、お話をする機会をもらいました。君たちが入学して間もない5月のことです。その時、私は皆さんにこんな課題を与えました。「君にとって大事な言葉・励まされた言葉・印象に残っている言葉はありますか。エピソードと合わせて300字の文章にまとめ、紹介をしてください。」

「**苦しい時は前を向け**」—空手の全国大会。接戦で負け、悔しくて涙が出た。その自分に先生は言った。「泣いて悔しがめることは成長につながる。だけど下は向くな。下を向いたら心は弱くなる。苦しい時こそ、前を向け。」—これから始まる高校生活、この言葉を忘れず、成長をしていきたい。

「**僕の顔をお食べ**」—これはアンパンマンの言葉。「自分が傷つくことなしに正義はありえない。」アンパンマンの作者やなせたかしさんの考えに感銘した。自分も人のために何かができる人間になりたい。この課題から見てきたのは、15年というまだまだ短い人生であっても、自問自答し、もがき、悩み、それでも前に進もうとする皆さんの姿でした。

君たちの高校生活のスタートとリンクするのは、水泳の池江璃花子選手の白血病からの復活である。「**すごくつらくてしんどくても、努力は報われるんだ**」東京オリンピックの代表を勝ち取った彼女は涙ながらに語った。



2021年度校長室だより4月号の『今月の言葉』を飾ったのは、この彼女の言葉だった。

秋篠宮家の長女眞子さんの結婚が話題となったのもこの年のこと。皇籍離脱一時金ももらわず、儀式も行わず、結婚に踏み切った眞子さんに作家の森まゆみさんは次のような言葉を送りました。

「私の尊敬する知恵ある老人は『**失敗のない人生はそれこそ失敗でございます**』と言った。この言葉を眞子さんにプレゼントしたい。家柄、財産、職業に安全弁のついたご令息との結婚など、何わくわくすることがあるだろうか。思うように生きたい。好きな仕事をしたい。もっと別の貧しい、過酷な社会があることも知るといい。うまくいかなかったらやり直せばいい。人に強いられる人生には恨みしか残らないが、自分の信念で選んだことなら責任の取りようはある。眞子さん、アメリカで羽ばたいてください。」

自分で自分の人生を切り拓き、生き抜く。当たり前のことながら、これが難しい。ミャンマーを中心に医療を無償で提供し、多くの子どもの命を救うことに人生をかけてきた医師である吉岡秀人さんを紹介しよう。「Japan Heart」というNPO法人を立ち上げ、医療を提供するだけでなく、病気で親を亡くした子どもたちのために孤児院を設立する仕事もしてきました。「医師の役割とは何か」彼は次のように答えます。「**病気を治す**」ことだけではなく、「**その人の治療後の人生を豊かにすること**」。がんの腫瘍を抱えた子どもの治療を行った時のこと。その子の腫瘍は大きく膨らみ、これを取り除いたとしても余命は1年ぐらいだとわかっていた。でも手術は行う。なぜならば、ひょっとしたら1回は学校に行けるかもしれない、マーケットに買い物ぐらいなら行けるかもしれない。その経験はこの子の人生に光をもたらす。この子の家族にもそれはうれしい記憶として残るはずだ。**病気は治せなくても心は救える**。この子の人生に小さな花を咲かせることができる。これが、苦しい取り組みの中で、彼がたどり着いた結論

でした。

彼は若い世代の人達に向かって「**人としての基礎体力を今こそつけてほしい。**」と呼びかけます。人生はやがて熟成・発酵し、虫メガネが太陽の光を一点に集めて紙を燃やすように、自分自身のやりたいことにぐっと向かっていける時が来る。しかし、人生の傍観者にはその時はやってこない。**人生の Player になってほしいんだ。**そのために基礎体力を養ってほしいんだ。では、どうやったら、人としての基礎体力を身につけることができるのか。彼は言います。嫌いな仕事・苦手な仕事をやってみる、反りの合わない人とチームを組んで何かに取り組んでみる。単に自分のやりたいことややりやすいことだけに取り組むのではなく、自分に少し負荷がかかる、ストレスをもたらすことに取り組んでみる。そうすることで、自分自身の中に柔軟性や寛容性が生まれ、思わぬところで人間としての幅を広げることに役立つことがある。「人生の豊かさ」とは何か。「**いいことも悪いこともその両方の経験をたくさんすることではないのか。**」と彼は言います。いいことも悪いことも引き受け、自分自身の中で消化していくことにより、人間の厚みは育っていく。そのためにも、「君も自分自身の人生の Player になろう」。傍観者になれば時間だけがこぼれ落ちていき、取り戻すことはできない。彼は言います。「スポーツで考えてみよう。例えば、ラグビーの試合を観て、もちろん観客としても感動することはできる。だけど、悔しさも含め、一番大きな感動を手にするのはほかでもない、選手そのものだ。」

君たち自身の言葉にもどろう。多くの人に支えられて 18 年間の人生を歩んできたが、何よりも君たちを支えてくれたのは、君たちの家族だ。血縁があるなしに関わらず、家族として君たちを育ててきてくれた人たちだ。「**人生、生きていりゃなるようになる**」—自分の進路や人生の設計についていろいろと悩んでいた時期に父が僕にかけてくれた言葉です。「まあ、人生生きていりゃなるようになるからさ」そのちょっとしたひとことに、当時いろいろと張りつめていた自分は多少なりとも救われました。

「**泣いてもいいよ。泣いた分だけ、きっと花が咲く。**」お父さん、お母さんの言葉は言うまでもなく、慈愛に満ちています。保護者の皆様、ご挨拶が最後になりました失礼をお許しください。お子様のご卒業、おめでとうございます。この3年間、私たちも含めて暖かく支えていただきましたこと、心より御礼申し上げます。

さあ、もう一度、君たちの言葉に戻ろう。「**最大のライバルは自分自身**」これもみんなが挙げた言葉の一つ。「**苦しいときこそ、本当の自分が分かる**」「**孤独に慣れろ！一人は悪いことじゃない。**」—この18年間、自分自身と向き合って生きてきた。自分なんてちっぽけで、何の力もなく、あまりにも頼りない、情けない存在。60年以上生きてきて、君たちに伝えられることが私にあるとすれば、そのちっぽけな自分に対して、なんてかけがえのない存在なんだと身体の内芯でとらえる日が必ずやってくる。30年前、その時が私にやってきたように、君たちにも必ずやってくる。その日を楽しみに、君も人生の player になろうと呼びかけます。失敗しても大丈夫。その時は声を出して言ってみよう。「失敗のない人生、それこそ失敗でございます。」君たちの人生に、まさしくふさわしい、価値ある、意味ある幸せがたくさんありますようにと祈り、私の式辞といたします。卒業、おめでとう。

遥か先へ羽ばたく—卒業生代表の言葉 3年D組 柘植 あかね



思い返せば 3 年前、私たちはこれから始まる高校生活に不安や期待と共に入学をしてきました。しかし、コロナウイルスの影響で、私たちが思い描いていた高校生活とはかけ離れたものでした。1、2 年生では行事が大幅に縮小され、何をしても制限が私たちの周りに付きまとい、苦しい高校生活が続きました。当時の私は生徒会役員で行事を運営するにも制限に阻まれ、何度も何度も案を考え

直し、つらい思いをしたのも覚えています。

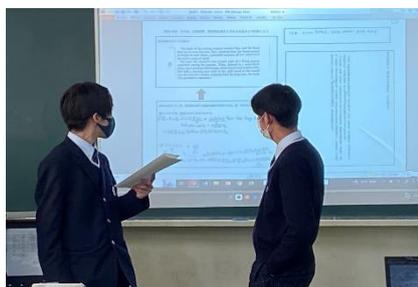
しかし、コロナ禍で私たちが何もできなかったと問われると、それは違います。制限の中でも最大限のことを、と行事でも部活でも諦めることをやめず、幾度も試行錯誤を重ねながら、今できる最大限のことを実行してきました。そのおかげで中途半端に投げ出さず、最後までやり遂げることができました。当たり前のことかもしれませんが「凡事徹底」その当たり前のことこそ難しいのだと思います。

このような私たちの努力が実ったのか、3年生は制限付きではありますが、4年ぶりに一般公開をする形で文化祭を行うことができました。準備では早く来たり、前日の最後まで残って仕上げをするクラスもあり、全力を注いだ文化祭となりました。他クラスの人と学年を越えて関わることができ、学校の団結力が高まったのを感じました。コロナ禍明けで前例がなく、成功できるかというプレッシャーもありましたが、悪戦苦闘の末に成し遂げることができました。

私たちは紆余曲折を経て、様々なことを経験し、学びました。コロナ禍の辛さ、勉強・部活動の忙しさによる苦しい日々が続きましたが、3年間を終えることができたのは、そばにいてくれた友達、そして真摯に寄り添ってくれた先生方や両親のおかげです。私たちは“気づけばいつも誰かに支えられ”、ここまで歩んできました。私たちはこれからも夢に向かって“歩き続けます”。“これから先、どんなに辛くても”自分の決めた道を信じて、“諦めず”“遙か”先へ羽ばたいて行こうと思います。

最後になりましたが、これまで支えてくださったすべての人に感謝を申し上げ、卒業生代表の言葉といたします。

在校生の皆さんの授業も締めくくりの時を迎える



3年生の卒業とともに、在校生の皆さんの進級も目前に迫ってきています。この3月は「終わり」と「始まり」が交差する時期。授業も1年間の締めくくりのみならず、次年度への君たちの学びを展望して計画がされています。

2年生の文理コース文系クラスでの「文学国語」の授業では翻訳や言語の比較をめぐる評論を2本読んだ後に、発展学習として、『羅生門』を英文での翻訳文と比較し、それぞれの言語の特徴や、作品にもたらす効果を考える探究学習が行われました。『羅生門』の最後の場面で、「冷然として」老婆の話を聞いていた下人が「きつと、そうか」と語ります。この後、下人は老婆を蹴倒し、着物を剥ぎ取り、「またたく間に急な梯子を夜の底へ駆け下り」ていくのです。この下人の言葉が、「You're sure she would, eh?」と翻訳されていることに注目した生徒たち。様々な含みを持って表現されている日本語に比して、英語での翻訳はかなり意味合いを限定した表現になっていることに注目しました。私も彼らの指摘は面白いと思い、発表に耳を傾けると同時に、どう翻訳されることがここでは適切なのかと思わず考え込んでしまいました。「You」が主語でよいのか、ここでの「eh?」を読者はどう解釈するのか、私なら、やはりここは「I」で始まる文を持ってきたいところか…等々。生徒の発表を聞いて、これは大学での研究にも十分に通じていく課題であると感じました。「もう一度『羅生門』という作品にしっかりと向かい合ってみよう。」2年生の皆さんの取り組みは私にそんな意欲を湧かせてくれるものでもありました。

さあ、春がやってきます。新しいスタートを切るために、しっかりと充電し、力を自分自身の中に蓄えましょう。一年間、ご愛読ありがとうございました。

校長 山口喜久枝

